おおとり会だより

平成31年3月15日発行
静岡女子短期大学
静岡女子大学
同窓会　おおとり会

言葉の杖『看却下』

会長　長屋梅子
（国文学科・短大七回生）

同窓生の皆様、その後お変わりはございませんか。

さて平成三十年度の同窓会総会は、昨年同様クーポール会館にて行いました。蔭山昌弘先生を招聘して「生きる力を支えるもの」と題しての御講演をいただきました。素晴らしい人生談に感動したことを思い出します。示唆に富んだ先生のお話は、私たちの生き方や、ものの見方考え方への刺激となり、学びの多い一時となりました。

あれから半年、同窓会も動きがありました。数年前から改革の波に乗り、名簿管理・発送業務・総会や会合の在り方等改善に努力してまいりましたが、本年は特に記念に残る事業をやらせていただきました。

一つには、大学管理棟の入り口の植え込みにあります「滴々の歌碑」（高原博名誉教授の歌）と「新生への礎」（現県立大学創立十周年、おおとり会記念モニュメント）の見事な甦りであります。「滴々の歌碑」につきましては、食物科の教授でありました高瀬恩師からのお口添えにより、同窓会の事業として造園業者に依頼しました。「新生への礎」につきましては、学生室長の石川先生の御尽力により、周辺のサツキ等の手入れを大学関係の造園業者に依頼されたとの御報告をいただき、間髪を入れない大学側の対応に、心から有難く感謝・感激でした。お近くにお越しの際は是非お立ち寄りください。

二つ目には、県立大学合同同総会第二回目が俄か支度ではありましたが、開催されたことです。その中にしっかりと私たちの「おおとり会」も位置づいていました。どんな組織の下、活動として何ができるか、何が求められているのか意見交換をしました。動きはこれからです。学長さんの目指すところを強力にバックアップできる団体として成長することを願って止みません。

三つ目には「おおとり会」のホームページ立ち上げであります。会員の減少はあっても決して増えることのない運命にありながらも、未だ四千弱の会員がおりますので、最後まで「会」を大切にしていきたいという気持ちは、年々強まるばかりです。若い仲間が、時代に即した運営をと建設的に捉える姿勢は大変有難く、それを止める理由などどこにもありません。いまさらと思う方もいらっしゃるでしょうが、行く末の限られている「おおとり会」だからこそ、今出来ることは今やろう！という考えもあるのではないでしょうか。

そして最後に、雨の中の「剣祭」。今日、何としてでもやらねば…という強い思いは、降っていても「実施」となりました。次第に晴れるという天気予報を信じ、開始時間を遅らせてスタート。昨年台風のため流れてしまった「昔の遊びにチャレンジ」は今年はじめてのテーマ。不安と興味・期待の入り混じる精神状態のまま「おふくろの店」は開店となりました。幸いにして青空も広がり、いつになく子供たちの参加も多く、店はごった返すほど盛況でした。食品の販売はなくとも〝やっていける〟という自信に繋がった方も少なくないと思います。

振り返ってみれば、この短い期間の中で幾つもの密度の濃い事業を納得のいく形でかくも為し終えてきたことかと、充実感に満たされながらも、改めて多くの方の有難き存在と、皆さんで育て上げた成熟度の高い「おおとり会」という組織・団体に感無量となる自分を覚えます。

私の座右の銘は『看却下』。動きのある時にこそ心に秘めて、転ばぬよう気を付けてきました。まさしく言葉の杖でありました。臨済宗の祖、五祖法演と圜悟克勤との問答の中の言葉であり、単なる足元を見るのみでなく、近くにこそ大切なもの（真理）があることを見逃してはならないと教えてくれていることを、心してこれからも奉仕に徹していきたいと思っております。

末筆になりましたが、今日まで、学長様はじめ諸先生方・役員・会員の皆様の温かき御指導・御鞭撻に心から感謝申し上げ、皆様の御健康・御活躍をお祈り致して御挨拶に替えさせていただきます。

はばたき寄金

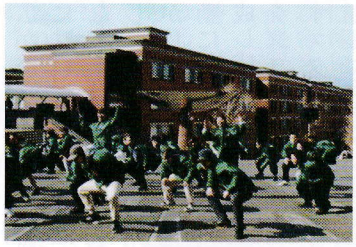
平成三十年度の『おおとり会賞』は、左記の団体が選出され、平成三十年四月十九日に行われた開学記念行事「はばたきのつどい」において、おおとり会長から表彰されました。

ダンスサークル Genesis（ジェネシス）

ジェネシスは、多くのダンスイベントでパフォーマンスを披露し、多くの人を楽しませ、又、チャリティーダンスイベントを主催し、社会貢献にも寄与しています。

「毎週水曜日に、当大学体育館で活動を行なっています。四月末に行なうイベントは、自分達のダンスで誰かを助けられないかという考えのもとに立ち上げました。毎年、フィリピンのパラワン島の子供達の支援を目的に、他の大学と協力して、県立大学大講堂にてイベントを開催しています。」

代表　桑原菜摘



私達も「若い力」を応援していきます。

輝く女性シリーズ Ⅳ

女性のエンパワメントをお手伝い

谷口年江
食物学科（大学十二回生）

おおとり会の役員の皆様にはいつもアイセル21をご利用いただきありがとうございます。アイセル21は静岡市女性会館と葵生涯学習センターの複合施設で、私は昨年4月より女性会館の館長を務めております。当館は平成4年に女性を取り巻く諸問題を解決するための学習や活動の場として設置されました。平成19年度から私が所属するNPO法人男女共同参画フォーラムしずおかが指定管理者として静岡市より運営を任され、この春13年目を迎えました。

今年は、男女共同参画社会基本法が制定されて20年となる節目の年です。私が大学を卒業した頃、女性はクリスマスケーキに例えられ、就職しても20代半ばで寿退社するのが当たり前の時代でした。その後、男女雇用機会均等法が施行され、育児休業法（のちの育児・介護休業法）ができ、近年では女性活躍推進法の制定など、女性が働き続けるための制度は整ってきました。現に、働く女性、働き続ける女性は増え、今では共働き世帯数が専業主婦世帯数の1・8倍にもなっています。しかし、働く女性の半数以上は非正規雇用で、正社員でも女性の給与は男性の76％と格差があります。さらに、昨年は、大学入試における男女差別、政治家や官僚によるセクシュアル・ハラスメント、一流大学の学生による強制性交罪事件など、女性の尊厳が踏みにじられる事件が次々と明るみに出ました。男女平等への道のりは険しいと実感させられた一年でした。

女性会館では、男女共同参画を推進するための拠点施設として、講座企画運営事業、相談事業、情報事業、人材バンク活用事業、団体活動支援事業等を行っています。中でも私は、講座企画運営に長く携わってきました。女性会館の講座は「女性の隠れたニーズを掘り起こし、ジェンダー課題の解決につなげる」というもの。その生みの苦しみは何度も味わっていますが、講座の参加者が、少しでも自信をつけたり取り戻したりしながら、一歩踏み出していく姿に励まされています。二年前からは女性のための相談室も私たちが担うようになりました。女性の悩みは、個人の問題として語られますが、その背景には根強い性別役割意識や男女差別、暴力に寛容な風潮が潜んでおり、社会の構造的な問題そのものだと実感します。誰もが自分らしく生きることができるように、女性がもともと持っている力を引き出す「エンパワメント」をお手伝いすることこそが、私たちの仕事だと確信しました。

新しい時代を迎え、女性会館が取り組まなければいけないテーマは年々変化しています。性の多様性の問題、災害時の性別によるニーズの違いに配慮した支援のあり方、女性活躍や多様な働き方の陰に隠れる女性の困難などその領域は広がるばかりです。新しい課題に取り組むためには、専門的な知識や新しい情報を得るだけでなく、身をもって体感した上で自分なりに咀嚼し、事業に生かす力が求められます。スタッフが目標を見つけて資格を取得したり他分野の活動に参加したりしながら、経験を重ね人脈を形成し成長することによって組織も進化します。ミッションを共有し、その実現のために力を尽くすスタッフに感謝は尽きません。ちなみに、副館長は女子大の後輩萩原美栄子さん（英文学科20回生）。私の大事な片腕です。素敵な仲間とともに、静岡の女性のためにもうひとふんばりしたいと思います。

女性に対する暴力をなくす
運動イベントでスタッフと共に
（筆者は前列左から２人目）

おおとり会 ホームページへ ようこそ！

我が同窓会の存在を多くの方々に知っていただきたいという思いから、平成29年度にワーキンググループを立ち上げました。翌平成30年度おおとり会総会において、ホームページ開設が承認されました。母校の歴史に関する資料や記録写真は少なく、多大な時間と労力を要しました。開学から閉学までの時代の移り変わりの中で私たち皆が学び合い、巣立っていった貴重な青春時代の一シーンの記憶が、ここに残されればおおとり会が存在した証となります。ホームページ開設までに多くの方々のご協力と資料提供をしていただきましたことに、深く感謝いたします。今後も皆様の情報交換の場として活用されていくことを願っています。

★アドレス https://dousoukai.site/ootorikaihp/

芹沢銈介先生と被服科

憧れの芹沢先生からの学び

天田淳子　被服学科（短大七回生）

私達短大七回生が入学したのは、昭和三十二年です。静岡に女子の為の教育の場が無い事を憂えた、当時の県知事始め教育に関心を持っておられた識者達の強い要望もあって、昭和二十六年四月一日、静岡女子短期大学が開学しました。初代学長の「一国の文化の高さ、深さは、その国の女子の教養の高さ、深さによって計られる」という信念のもとに、授業内容も女性としての人格・教養・知識を重視したものでした。資格は与えないという方針のようで、一流の教授陣のもとハイレベルの教育をモットーとしていたようです。その中のお一人に芹沢銈介先生がおられたのです。先生は、第一回生の頃から講師として赴任され、八月には二・三日の集中講義も受け持たれておりました。先生は、女性のおしゃれに関心を持ち、色・形だけでなく、日常の生活の中にも美を見出す意識の高い方でした。芹沢先生は、民芸運動家柳宗悦氏の影響を受け工芸の道を歩まれ更に大礼記念国産振興東京博覧会で沖縄の紅型と出会いその技法の修得の為沖縄に修業に行かれました。第二次世界大戦で中断せざるを得なかった何年間の空白を埋めるかのように精力的に活動されておりました。昭和二十九年二月から、静岡市葵区の吉見書店で作品展を開催されておりました。芹沢先生、助手の大橋先生の作品、更に学生の作品十数点が展示され、特に博物館から借用した十二単衣、束帯には、多くの見物人の目を引いたようです。昭和三十一年、芹沢銈介先生が、重要無形文化財　紅型染保持者として人間国宝となり国内外に知れ渡る事になったのも学校の知名度を上げた一因だったと思われます。私は芹沢先生の作品を目にした時、こんな美しい染物が日本に存在しているのかと大きな衝撃を受け、何としてもこの学校に入りたいと思い受験いたしました。奇しくも入学を許され、迷うことなく被服科を専攻致しました。時を同じくして学校としても、学生・父兄・一般社会から資格授受の働き掛けもあり昭和三十二年入学生から、国語・家政・英語科に教職課程が認可され、中学校教師としての資格が得られるようになりました。私達は義務教育なみに朝から夕方までの授業を受け勉学に励んだ思い出があります。芹沢先生も各方面でご活躍されておられ、ご多用の中、月一回程度教壇に立つと云うより実験室で作務衣姿で指導されました。芹沢先生は、多くを語ることはありませんでしたが実地に教えてくださいました。まずはデザインに始まり、渋紙で型紙を作り、そして浸した大豆をすり鉢でつぶして呉汁作り、米糠で糊作り、伸子張り、渋紙でつくった型紙を伸子で張った布に置いて糊で柄を置いていく『色差し』『全体を色掛け』『乾燥』最後に『水洗い』をして糊がとれると出来上がりです。いよいよ作品とのご対面。なかなか思い通りに出来上らなくて、皆で喜怒哀楽入り混じった思いで批評しあったものでした。よくしたもので、自分の作品が一番美しく見えるのは不思議なものですね。

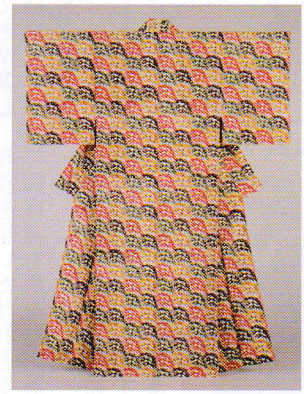
静岡市立芹沢銈介美術館蔵

作務衣姿の芹沢先生

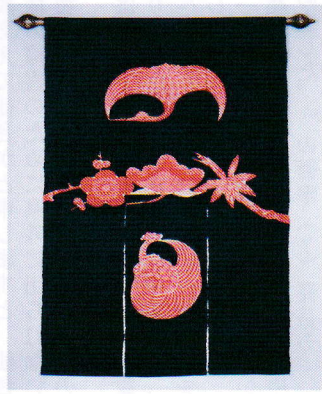
二年生の夏休みに芹沢先生から宿題が出されました。スケッチブックに身のまわりの物を何でも良いから描いて新学期に提出するようにとの事でした。何をどう描いてよいかわからず、手当り次第に果物・石ころ・貝殻・木の葉・花等精密画のように忠実に描きました。多くのスケッチブックの中から〝この絵、もらっていいかね〟と言って掲げたのが、私の描いたメロンのスケッチでした。とっさに自分のものだとは信じられませんでしたが、今振り返っても本当に嬉しい出来事でした。そんなこんなで楽しい二年間はあっという間に終わりました。

今回芹沢銈介先生の思い出という宿題を頂き学生時代を振り返ることができました。改めて人間国宝の芹沢銈介に巡り会えたことは最高の喜びです。本物を見る、本当の美しさを知る、先生から教えて頂いたことは卒業後の長い人生に大きく影響したことは感謝に絶えません。これからも日々精進して価値ある人生をと思っております。

芹沢銈介先生の作品より



1949年 作
竹波文着物



1955年 作
鶴亀 松竹梅文のれん

静岡市立芹沢銈介美術館蔵

1954年 作
壺屋風物文帯地